

どうなる？

# 新しい社会科

## 新学習指導要領が求める地図帳の使い方②

### —— 五感の活用と表現 ——

愛知教育大学人文社会科学系教授 寺本 潔

本誌の前号で筆者は「新学習指導要領が改訂の原理としている習得（地名の記憶や記号の理解）と活用（地図の判読や地図利用）の二大特色が地図帳には一冊に凝縮されている」と述べた。本号では一步深めて「五感の活用と表現」を軸に地図帳の使い方を考えてみたい。

新学習指導要領では「調べたことや考えたことを表現する力」の育成が随所に要請されている。これは全教科にわたって重視されている言語力育成の観点と絡む改訂である。指導要領の総則の「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」に「各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。」と記されている。ここで注意すべき点は「言語環境」や「言語活動」の意味するところを、単に国語科的な言葉だけでやり取りするコミュニケーションと捉えるべきではないということである。地図も立派な言語であり、図表やグラフ、模型、統計、写真

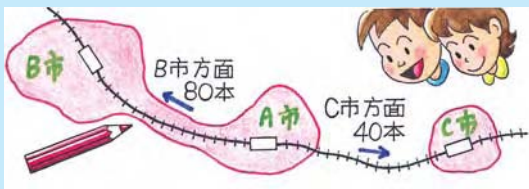
（映像）なども言語力を豊かにする言語環境である点を忘れてはならない。OECDによる国際学力調査の結果、読解力の低下が指摘されたが、読解力＝国語科の担当領域と即断しないでいただきたい。むしろ、社会科が担ってきた現実の問題場面に応じて地図や統計、写真など多様なテキストを読解しながら思考する力こそ、求められる新時代の学力と捉えることができる。



### 考えたことを表現する場面

例えば、第3学年の冒頭に位置づけられる身近な地域の学習で、市の交通の様子を扱う場合、学習指導要領の小学社会『解説』には次のような一文が記されている。『「交通の様子」を調べるとは、身近な地域や市で生活している人々などが利用している主な道路や鉄道などを取り上げ、観察、調査したり地図などを活用したりして、それらの名称や主な経路などを具体的に調べ、白地図に書き表すことである。交通の様子について調べる際には、身近な駅やバス停とその周りの様子を観察、調査したり電車やバスなどの路線図や時刻表を手掛かりにしたりして、自分たちの住んで

いる市と近隣の市との結び付きに気付くようにすることが考えられる。また、主な道路と市内の工場の分布、主な駅と商品の分布など、土地利用の様子を交通の様子と関連付けて考え、相互のかかわりに気付くようにすることも考えられる。」と記されている。つまり、市販の市街地地図を手がかりにして、白地図に道路や線路を書き写す（もしくはなぞる）作業を暗に示している。国道や有料道路、JRや私鉄路線などの名称は知っていてもどこからどこへ伸びているか児童は知らない。白地図に書き写すという単純な作業ではあるが、大事にしたい指導場面である。時刻表を手がかりにすれば「〇〇方面行き」電車が日に何本走っているかがわかる。その数字を白地図の路線の脇に記入させよう。また土地利用との関連とは、隣の市との間に市街地が切れ目なく続いている方向とそうでない方向を比べ、市街地の広がりや白地図上で縁取る作業を指示しよう。そうすれば、どちらの市とより結び付いているかに気付かせることができる。白地図への記入という表現場面を通して市の交通の様子をより深く理解することにつながる。



## 五感で地図を読む

地図嫌いの原因は、地図から風景が読み取れないことにある。地図帳に記載されている絵記号や地名、等高段彩、経緯線などを単なるマークや漢字、あるいは模様としてしか捉えないからだ。「うなぎ」の絵記号

があれば、蒲焼の匂い（嗅覚・味覚）や養鰻池（視覚）を思い浮かべさせ、「自動車」の絵記号が見つかれば、プレスや溶接の音（聴覚）を出して製造されている自動車をイメージするように促せば、児童は地図読みを好きになる。さらに風景を豊かに想像できる下地をつくるためにも、児童を連れて様々な風景と出会わせたいものだが、現実的に無理。だからこそ、写真を多用するのである。地図帳で「うなぎ」の絵記号を発見したら養鰻池が写っている写真を提示し、「自動車」マークを見つけたら、製造ラインが写った写真をセットで提示したい。写真と地図との結合を丁寧に行うか否かで地図読みの水準が異なってくる。p.7に掲載されている「この地図帳の記号」の内、社会科学習で頻出する「産業に関する記号」「地形の記号」「交通の記号」「環境・歴史の記号」の中からいくつか選出し、あらかじめ画用紙大程度の景観写真を数枚用意することから始めてはいかがだろうか。教材として使用できる景観写真は、教科書中の写真を拡大したり、教師向けの教材関連ネット上でも容易に入手できる。

## 指旅行で臨場感を醸し出す

地図読みの基本は、「見る」のではなく「読む」姿勢が大事といわれるように地図への注意の向け方にある。大人ならば、視線を地図帳の紙面全体に落として地方・県・国土等の輪郭や海岸線を目で追うことができるが、子どもの場合は視野が狭い点と注視し続ける忍耐力が弱い点で目線だけで地図を読ませることは難しい。そこで、簡便で効果的な指導法としておススメしたいのが「指旅行」である。これは、子ども自身にひとさし指を



『楽しく学ぶ小学生の地図帳（初訂版）』 p.38-39

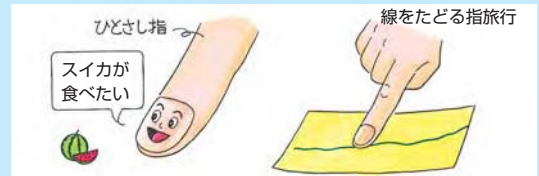
使わせ、地名や絵記号を指したり、鉄道や海岸線を辿ったりする際に有効な指導法である。約20年前から筆者が案出して紹介してきたが、自分自身をひとさし指に見立てて図上で旅行するかのように想像させるのがコツ。「ひとさし指はあなた自身です。あなたのひとさし指の爪に自分の顔（目・鼻・口・耳を描写）をマジックで記入してごらん。まるで自分が地図の上で旅行しているかのような感覚になるよ」と促すのがポイント。

例えば、船橋市に住む小学4年生が「わたしたちの千葉県」の学習場面で、県内の数箇所を図上旅行でめぐって県の様子をまとめる際にも有効にはたらく。p.38～39の地図を使い、「総武本線を使って銚子まで指旅行しましょう。車窓の左右に見えてくる景色を指に描いた目で眺めて紹介しましょう。」と促して発言させるのである。「たまには途中下車してもいいから、絵記号に着目してみましょう。」「農産物の絵記号が見えたら、爪に描いた口を使って、八街の付近で『らっかせい』や『スイカ』を食べてもいいよ。」と促すの

である。つまり、指旅行をさせながら、同時に感覚器官をイメージさせるのである。「読み」という活用場面を駆使して指旅行発言で「表現」に移行させるわけである。

### 指旅行で距離感を獲得させる

図上で指旅行をさせながら、地名や絵記号



を読み取らせるだけでは、地域像は形成できない。距離感や面積感の育成が自県や国土のイメージ形成には不可欠だからだ。効果的な指導法の一つを紹介しよう。沖縄や北海道の気候に応じた土地の暮らしを扱う5年の単元で、いきなり「教科書の〇〇ページを開きなさい。今日から沖縄の暮らしを学びます!」と切り出すようでは学習効果は半減してしまう。筆者が担任ならば、「地図帳の世界だけど、クラスでこれから沖縄



に旅してみたいと思います。ひとさし指を羽田空港に置いてください。そして地図帳のp.13~19を開き、隣の人とつないで日本列島を見わたす地図を完成させなさい。」と指示するだろう。教師はそこで客室乗務員に変身し「5年1組の皆さん。〇〇航空△△便にご搭乗いただき、ありがとうございます。これから那覇空港に向かって飛び立ちます。」とアナウンス。児童に椅子を後ろに傾けるように促すとまるで離陸するような感覚を抱かせることになる。

次に「開いた地図帳を眺めて、約2時間30分(数字はp.14の航路に記載)のフライトを10分間で楽しめます。飛行機の窓から日本列島の地形が見えますか? 隣の人と、見えてくる景色をつぶやきましょう。南西諸島に入ってきたら、島の名前も確かめましょう。」と促すのである。さらに「地図帳の上や下に置いてある『かんたんものさし』を使って東京—那覇間の距離(直線で約1600km)を測ってみましょう。」と指示することで日本列島の南北の長さが理解できるようになる。このとき、緯線も扱うとさらに効果的である。「羽田から離陸した飛行機は、那覇空港に着陸するまで何本の青い線(緯線)を越えて行きますか?」と気付かせるのである。東京付近には北緯36度の緯線が、那覇付近には26度の緯線が走っている。実に緯度10度も移

動する。緯度は、気候を客観的に捉える指標である。地球儀指導と相俟って指導してはいかがであろうか。もちろん、「北海道の暮らし」にも指旅行による地図読みは応用できる。

## 🌐 活用と表現はリアルであること

社会科からリアリティを削ってはつまらない教科に陥る。地図帳は、県や国土、外国の様子を図で描いただけの紙面と位置づけていては駄目である。わずか76ページの小冊子に過ぎないが、日本や世界の現実がつまった情報箱なのである。五感や指旅行を駆使して活用型学習を展開するのは、ほんの入り口である。本当の活用とは、地図を用いて思考させる場面である。自分の県の形はどうして東西に長いのか、東北・北海道地方が日本の米どころになれたのはなぜなのか、太平洋ベルトはどのように形成されてきたのか、源平の戦いが西日本に偏っているわけはなぜなのか、江戸幕府はどうして伊豆の下田港を開いたのか、原爆はなぜ広島・長崎に落とされたのかなど地図で思考させたい場面は山ほどある。思考が深まれば表現も深まる。挙手だけが盛んな「ハイハイ授業」に陥らず、じっくり考えさせる「学びあい・聴きあう」授業が求められている。地図帳は、そんな豊かな学びを実現するためにも重要な働きをしてくれる。